続・チエの青春
（マサル純情編）

ミナミの民

第一章

河会塾難波校の屋上は、飛び降り防止のため高さ2.5mの金網フェンスで囲まれている。
ベンチが２，３個置いてあるだけの殺風景な空間だ。
それでも深呼吸するためにときおりここを訪れる生徒はけっこう多い。
授業の合間に談笑するカップルの姿もときおり見られる。
が、独りで思いつめたような顔をしてじっとフェンス越しの街を見下ろす者たちも多い。
そんな男がここにもまた一人…。

そして、そんな男に近づいてきて声をかける友人が一人。
「マサル…」

「やっぱりここにおったんか」
「……」
「そろそろ次の授業始まるど」
「……オレ、帰るわ」
「帰るて…今日マサル一回も授業でてへんやないか」
「ええねん」
「マサル帰るんやったら俺も帰るわ」
「おまえはちゃんと授業出てから帰れ」
「俺、授業よりマサルの方が心配や」
「…ええかげん、オレのことほっといてくれ」
「マサル、俺、ゆわんとこう、ゆわんとこうとは思っててんけど、やっぱりゆうわ」
「なんや」
「チエのことは忘れたほうがええ」
「……」
ふてくされた顔で背中を向けるマサル。

京都の某国立大学医学部の受験に失敗し、浪人生活を強いられているマサルと、同じく京都の私立大学に合格したにもかかわらず、一浪して国立大学を受けなおすことを決めたタカシ。

しかし、タカシが浪人した理由は誰よりもマサルがよく知っていた。

四月から同じ予備校に通い始めて1ヶ月あまり。マサルがまったく勉強に身が入っていないことはタカシの目からでなくとも明らかだった。

両親の家を出て、今は叔父の家にいるマサルは、母親の目がないのをいいことに、予備校をサボ

ったり、夜遅くまで外出したりと、いいかげんな生活を送っていた。タカシも自然それに付き合わされ、昼間からマサルの部屋でゴロゴロしたり、夜も喫茶店でうだうだ過ごしたりという無為な日々を共にしていた。

マサルが考えていること、感じていることは、タカシには手に取るようによく分かった。私立の中学高校一貫校に通ったマサルとは違って、公立の中学と高校に通ったタカシではあるが、マサルとはほとんど毎日会っていた。

タカシはチエと同じ中学と高校に通っていた。マサルが中学に入ってすぐにノイローゼになり、それから立ち直った後は、タカシはマサルの前で極力チエの話題は出さないようにしていた。マサルもチエについては何も言わなくなった。

しかし、去年の秋、再び劇的な形で火がついて以来、マサルの心にはチエのことしかなくなってしまった。マサルが半ば強いられて西萩から遠い叔父の家に移った後も、マサルのノートを定期的にチエに届けることがタカシの役目になった。

不思議なことに、秋以来、マサルはチエに直接会おうとはしなかった。その代わり、タカシに託されるチエ宛のノートの量は時を追って増えていった。

こんなにノートを書いていて、受験勉強する時間などあるはずがない。いくらマサルの成績がよくても、落第することはタカシには目に見えていた。しかし、マサルの両親や叔父にはノートのことは絶対に秘密だった。

これも秘密にしていたことだが、タカシはある時期から、チエにノートを渡すことを止めていた。チエが受け取ってくれなくなったからではない。チエが明らかにマサルのノートを重荷に感じていることが分かったからだ。

頻繁にチエの元を訪ねるようになったタカシは、チエとユキノブの仲が次第に深まっていくのを目の当たりにしていた。正直言って、タカシにさえ、チエとユキは似合いの二人に見えた。チエが高校を卒業すると、ユキはいっそう頻繁にチエの店（家）を訪ねるようになり、昼間から上がりこむこともあった。驚いたことに、テツですらそれを黙認しているようだった。

こうしたことをタカシは遠まわしにマサルに知らせようとしてみた。しかし、自分の妄想の中に囚われたマサルに、現実を見つめる心の余裕などあるはずはなかった。

とはいえ、いつまでもこんな生活を続けていくわけにはいかない。タカシはタカシで、マサルをどうやって立ち直らせるべきかを思いつめていたのだ。

「マサル、今日は俺、はっきりゆわせてもらうで。チエのことはもう、考えんほうがええんや。ノートなんかいくら書いたって、あいつ全然読んでへんみたいやし…」
「……」
遠くを見つめたまま、何も言わないマサル。
「俺ら、今はとにかく大学に入ることだけ考えたらええんや。チエのことは、大学に入ってからでもええやないか。それに、大学行ったら、チエよりええ女いっぱいおるど」
「…おまえ、全然分かってないな」
「え？…」
「おまえ、オレが大学落ちたの、オレがチエのことばっかり考えてて勉強できへんかったからやと思てるやろ」
「そうと違うんか」
「オレ、試験問題半分の時間で全部解けてたんやど。でもわざと書けへんかったんや」
「なんでそんなこと……」
「オレはなあ、今年一年予備校なんか通わんでも来年も合格できるんや」
「……」
「オレには計画があるんや」
「計画？」

第二章

食堂「チエちゃん」。

4月から、食堂は大きく変わった。朝、昼、夜それぞれ食事時に店を開くようになったのだ。

チエの生活も大きく変わった。
朝は五時半に起きて店の準備。九時までの朝の営業が終わると、いったん店を閉める。
十一時半から午後一時半まで再び営業。夕方は六時に店を開け、十時まで営業する。
そして、空いた時間には、洋裁学校の非常勤講師になったヨシ江が家にいる日は洋裁を習い、ヨシ江が出勤して家にいない日には簿記の勉強をする。

簿記の日には、ユキが店に来て、店のテーブルで一緒に勉強する。ユキは、高校を中退しているが、独学で法律と会計の勉強をしているので、チエに教えることができるのだ。

ヨシ江がいない日には、たいていテツが家にいる。店は手伝わないが、奥の座敷にいるだけで「虫除け」になるのでチエは内心助かっている。

しかしテツが家にいる本当の理由は、ユキとチエの勉強を「監視する」ためだということを、チエもユキも承知している。テツが二人の会話に奥の座敷や階段の下で密かに聞き耳を立てていることも。チエはむしろ、そんな状況を楽しんでいた。

テツはユキと会うのを明らかに避けていた。チエが三人で一緒にお茶を飲もうと声をかけると、テツは裏口から出ていってしまう。ユキが店を出て行くと帰ってくる、といった調子だった。

定休日や、店を閉める日曜日には二人で出かける。といっても、ひょうたん池の周りを散歩したり、『防空壕』に行ったり、映画を観たりするだけの、チエに言わせれば「地味一な」デートだったけれど。ユキが、ミナミなどを歩いて知り合いに会いたくないらしく、繁華街に行くのを嫌ったからだ。

学校がなくなり、ヒラメと会えなくなったのは寂しかったけれど、チエは新しい毎日を楽しみながら過ごしていた。そこには、悔いのない過去と、充実した今と、希望に満ちた未来があった。

「…オレ、実は前からチエのお父はんのファンなんや」
ひょうたん池のベンチで、ユキがおもむろにそう言ったときはチエも驚いた。
「西萩に、ヤクザをようどつくけど、カタギには絶対に手ェ出さん人がおるゆうの聞いて、ガキの頃、憧れたもんや」

「…なんかずいぶん美化された噂のような気もするけど」
「一人でヤクザの組をつぶしたこともあるんやて噂耳にしたときには、一度会うて話聞きたいと思てん」
「それもちょっと話が違うような…」
「オレ、昔はケンカ弱くて、ヤクザによくいじめられたもんや。でも、チエのお父はんの話聞いて、そういう人になりたいと思た。それで必死で修行したんや」
「そんな人もおるんやなあ…でも、現実は違うんよ」
「え？」
「ウチのお父はん、見てたら分かるやろ。まともな仕事せんと、毎日ブラブラしてバクチしたり近所のヤクザどついてるだけや。今はもうあきらめてるけど、小さい頃、ウチが一人で店やらなあかんかったときは、自分のこと日本一不幸な少女やと思てたんよ。だからあんな人に憧れたりするのは間違ってる。ウチ、自分の子供には絶対おんなじ苦労させたないねん」
「……」

チエが思いつめたような表情になる。
「…ユキ、前、あんたウチの店で一緒に働きたいてゆうてたやろ」
「ああ」
「一緒に店やらへん？」
「…オレがあの店手伝うゆうことか」

「それだけとちゃう」
首を横に振るチエ。
「…一緒に暮らすゆうこと」

第三章

マサルの部屋。

昼間からゴロゴロしているマサルとタカシ。
「マサル、教えてくれ。計画てなんやねん」
「アホー　なんでおまえにゆわんといかんのじゃ」
「でも、計画があるてゆうから…」
「計画ゆうのは実行するまで秘密にせなあかんねん」
「でもいつ実行するねん」
「今タイミングをはかってるんや」
「タイミング…」
「作戦の実行はタイミングがすべてなんや」
「…」
「同じこと言うにしても、タイミングを間違ったら何の効果もないんやど」
「マサル、チエに何かゆうんか」
「おまえ、ほんまに単純な頭してるなあ…。何か言うゆうても、その…色々あるやんけ」
「色々てなんや」
「せやから、その…状況設定とか盛り上げ方とか…」
「なんかようわからんけど、やるんやったら急いだほうがええんとちゃうか」
「なんでやねん」
「だって、チエ、もう…」
ついに口を滑らせてしまったタカシ。
これまでマサルには内緒にしていた、チエとユキとの仲の進展や、ユキという男の評判、周囲が二人の関係を受け入れ始めていることなどを、タカシはマサルにありのままに話した。

「……おまえ、何で今まで黙ってたんや」
「オレ、ゆおうとしたんやけど、マサルが全然聞く気ィなかったんやんか」
「…それで、ノートはどうなっとんねん」
「…」
「チエに渡してくれて頼んだノートや」
「実は…」
……

町を歩くマサルとタカシ。
「おまえのせいで、オレの計画全部パーになってしもたわ」
「マサル、すまん…オレ…」

「…これからは絶対ウソつくなよ」
「ほんまにオレ…マサルのためや思て…」
「それがあかんねん！」
それまで比較的冷静だったマサルが突然声を荒げた。
「おまえも、お母はんも、オレのため、オレのためゆうけど、おまえらがオレのためにやったことがオレのためになったことなんかいっぺんもないんや」
「……」
「オレのためゆうんやったら、何もかもオレの好きにやらせてくれ。変に気ィ回されるから、オレ、どんどんあかんようなっていくんや」
「マサル…ところで、どこ行くんや」
「おまえは別について来んでもええ」
「頼むわ、オレせめて何かマサルの役に立ちたいんや…オレ、マサルのためにこの一年棒に振ったんやから」
「そうゆう言い方するから腹立つんやゆうてるやろ！」

難波から電車に乗って、*西萩の駅*　に着く。
「マサル、ひょっとしたら今日オレとこ泊るつもりか」
「アホ…おまえに話しかけられるとオレ力抜けるから黙っといてくれ」
「マサル！」タカシが急に小声になる。
「あれ…チエや」
食堂の前の道を掃除しているチエの姿。
「マサル…」
立ち尽くすマサル。チエの方を見つめながら、固まったように動かない。

そのまま２０分が過ぎた。
チエは店に入っていった。
まだ動かないマサル。

第四章

食堂「チエちゃん」の一日の仕事が終わり、後片付けに入るチエとヨシ江。
「…お母はん、ちょっと相談したいことあるんやけど」
「何ですか」
「ウチ、アパート借りようか思てるねん」
「え？」
「近くに部屋借りて、そっからここに通おう思てる」
「なんでそんなことしますねん」
「学校も出たし、そろそろちゃんと自立せなあかん思てるんや」
「ここにおったら自立できませんのか」
「…お父はんが、ね」
「？！」
「いつまでもウチが側にいてる思たらあかんねん。一人になってちゃんと考えさせんと」
「でも、そんなことしたらお父はんえらいゴネるのわかってますやろ」
「ゴネさしたらええんや」
「……」
「お母はん、ウチのこと疑ごうてる？」
「なんのことですか」
「アパートなんか借りたら、ウチがユキと悪いことするんとちゃうかと思てる？」
「…そんなこと思てませんわ」
「するかもしれへんで」
「チエも、もう大人ですさかい、自分のことは自分で判断できますやろ」
「お母はんはどうやったん？」
「え？」
「お父はんと結婚するまで、手ェも握らへんかったん？」
「も、もうよろしいわ、そんな話は…」
「キスくらいしたんやろ？」
逃げて行くヨシ江。
「…明日テツに聞いてみたろかな」

次の日。
「あかん…調子悪い…」
最近すっかりさえないテツ。町を歩きながらブツブツ独り言。
「町でちょっともヤクザ見かけへんし、カルメラもお好み焼き屋もすっかりマジメに働いてけつかるし…ワシ、一生このままサラリーマンみたいに退屈に過ごさなあかんのとちゃうか…」

「あかん、またイヤなこと思い出してきた。チエの奴、起き抜けにショック与えるようなこと言いやがって…何がアパート探すじゃ。典型的な不良少女のパターンやないか…」
「やっぱり、あのユキとかいう奴一回どついとかなあかんな…チエに手ェ出す前に半殺しにしとかんと、手遅れになってからやとどうしようもないもんな」

ひょうたん池　のベンチに座っているマサルとタカシ。
「マサル、予備校サボって朝からここに来たのはええけど、こんなとこでボーっとしててもしゃあないやんか」
「…うるさい、退屈やったら帰れ」
「チエの店行ってみよか。今昼飯やってる時間やど」
「アホー、いきなり行ってどないするねん。作戦ちゅうもんがあるやろ」
「作戦て…」
「それにしても、おかしいな…オレ、世界で一番チエの家庭のことに詳しいはずやのに」
「なにがおかしいねん」
「おまえ、チエが今男と付き合ってるゆうたやろ」
「…うん」
「しかもチエのとこによう遊びにいってるんやろ」
「そうや」
「チエのとこには今テツは住んでないのか」
「住んでるよ」
「そしたら、なんでテツがチエが付き合ってる男とケンカにならへんのや」
「それは、オレも変やなと思てるんや」
「…オレの推理では、そいつチエと付き合ってないんとちゃうか」
「だって二人で歩いてるとこも何回か見たことあるで」
「一緒に歩いてるからって付き合ってるとは限らへんやろ」
「でもあの雰囲気は…」
「とにかく、オレのカンでは、そいつはまだチエの家のことも、テツのこともよう知らんはずや。知ってたら遊びに行ったりできるわけないもんな」
「マサル、そしたら、まだ望みあるんちゃうか」
「軽軽しくゆうな。オレにとっては重大な問題なんや」
「…せやけど、マサル、なんでチエのことが好きになったんや。確かに美人やとは思うけど」
「……おまえにはオレの複雑な感情は分からんやろ」

「こらー！　金魚と金魚のフン！」
ドキッとする二人。
「テツや！」

ひょうたん池でマサルとタカシに出くわしたテツ。というより、テツに遭遇してしまったマサルとタカシ。
この三者（実質的には二者）の間に一体どうゆう会話が交わされたか、詳しくは語るまい。
ただ、約一時間後に両者が別れたとき、彼らの顔には形容しがたい微笑が浮かんでいたということだけは記しておく必要があるだろうーーー
そして、この会話の一部始終を聞いていた者がいたということも。
……
ジュニア「小鉄、なんやねん急に呼び出して。トメ吉が血相変えておまえが呼んでるて叫びながら走ってきたからびっくりしたわ」
小鉄「トメ吉はワシのゆうことには何でも血相変えよるからな…ところで、ちょっと頼みたいことがあるんや」
ジュニア「なんや、またメス猫嬢のマッサージか」
小鉄「アホ、あれはおまえが勝手に連れてきたから仕方なしに…まあええわ。とにかく、今からテツとマサルの行動を見張って、ワシに報告してほしいんや」
ジュニア「マサルとテツ…なんか変わった組み合わせやな」
小鉄「詳しいことはまた説明するけど、珍しくあの二人の利害関係が一致したんや。そうはゆうても所詮一時的なもんでしかないけどな」
ジュニア「…ようわからんけど、とにかく連中にゆうて、見張らしとくわ」

食堂「チエちゃん」。　午後のお勉強タイム。
チエ「明日、定休日やから、一緒に部屋探しに行かへん？」
ユキ「明日か…」
チエ「なんか用あるの？」
ユキ「いや…大丈夫やけど…」
チエ「ゆうとくけど、ウチ、まだユキと一緒には住まへんで」
ユキ「分かってる」
チエ「ウチ、まだユキのこと完全に知ってるわけとちゃうし、まだお互い知らんとこあるみたいやから」
ユキ「…オレもそう思う」
チエ「…ウチ、待ってるねん」
ユキ「え？」
チエ「ユキの方から、一緒になろうてゆうてくれるの待ってるねん」
ユキ「……」
チエ「別に…今のはウチの独り言やから、気にせんといて。今はウチ、ほんまに一人暮らしがし

てみたいだけやねん」

「チエー！　ワシも一緒に部屋探したるからなー！」
テツが帰ってくる。
「なんや、急に…びっくりするやんか」
「ワシ、心入れ替えたんや。これからはチエのええお父はんになるて決めたんや」
「…バクチでバカヅキでもしたんか」
「アホー、ワシ、お前の部屋探したるゆうとるやんけ」
「悪いけど遠慮しとくわ。テツと一緒に行ったら店の人みんな逃げてしまうから。それにどうせタチの悪い周旋屋ばっかり回ってヤーさんどつこうと思てるんやろ」
「実はもう、ええ物件があるんや」
「ええ物件？」
「明日一緒に見に行ってその場で決めよ」
（「どういうことや…」）訝しがるチエ。
「ところで、君。そこの不良少年」（ユキを指差しながら）
「誰にゆうてるねん」
「なんですか、お父さん」
「そ、そのお父さんゆうのやめんかい。…おまえ、ワシが何にもゆわんからって、勘違いすんなよ」
「はい」
「ワシはなあ…」
「ありがとうございます！」
一喝しようとしたところに出鼻をくじかれたテツ。
「オレ、ホンマにありがたいと思ってます！」目に涙を浮かべながら話し始めるユキ。
「テツさんにこうして口きいてもらってるのだけでも感激やのに、大事な娘さんと仲良うさせてもらって…ちゃんとお礼もゆわんと今まで来たこと、恥かしいです」
「お、おまえ、泣いてるんとちゃうか」
「オレ、ホンマに何て感謝したらええか…」床に正座して手をつくユキ。
唖然としてこの光景を見つめるチエ。
「テツさんは、命の恩人です！」
「こら…クサい演技すな。ワシ、おまえみたいなタイプにまだ免疫ないんや」
「演技と違います。オレの親、オレが小さい頃、テツさんのおかげで救われましたんや」
「？」

ユキが切々と話し始めたところによると、ユキが幼いころ、サラ金で借金をした父親の取立てに来ていたヤクザをテツが徹底的にどついたことがあるらしい。その結果、そのヤクザの経営していたサラ金そのものがつぶれてしまったという。もちろんテツはそんなことにはまったく無自

覚だったのだが、幼いユキの心にテツは正義の英雄として刻み付けられたのである。

「オレ、初めて会ったときに、御礼ゆうつもりやったんですけど、いつのまにかダラダラ来てしまって…申し訳ないです。どうかご無礼をお許しください！」
「き、気にすな。ワシは困った人間見ると放っとけんタイプやから」
（チエ「ウソつけ！」）
「お父さん…いや、テツさんが見つけてくれた部屋やったら、文句ないです。チエさんも喜んで入ってくれる思います。…なあ？」
「…まあ、とりあえず見るだけ見てみよか」
「ホンマにありがとうございました。テツさん、オレ、テツさんに憧れてヤクザの用心棒の真似事みたいなことしてるんです。まだまだ未熟な人間ですけど、オレにできることあったら何でもゆってください。なんやったら、テツさんと一緒に組に殴り込みにでも…」
「あかん、あかん！」
慌てて割って入るチエ。
「おまえ、中々見所あるやんけ。それやったらもっとはよゆわんかい。ワシ、おまえがいつワシにケンカ売りに来るか見とったんや」
「オレの知り合いにも、テツさんに憧れてる奴いっぱいおるんです。今度会うてやってください、お願いします」
「そうか、そうか。呼んでくれたらいつでも行ったるで」
「あ、オレそろそろ行かんと…ちょっと呼ばれてるとこあるんで。じゃあ、今日は失礼させてもらいます。（チエに向かって）じゃあ、また明日。」
「うん…じゃあ…」
去っていくユキ。

テツ（満足げな顔で）「チエ、お前ええ男と付き合うとるやないか。なんでもっとはよゆわんかったんや」
チエ（半ばあきれた表情で）「ウチも知らんかったんや…なんかウチ、すごい複雑な気分なってきたわ」

第六章

西萩駅近くのアパート。

「ここか…」
昨日テツが「ええ物件」と呼んだ部屋にテツと二人で見に来たチエ。
六畳プラスキッチン、ユニットバス付きで、部屋代もそんなに高くない。店からも歩いて数分と、疑心暗鬼のチエから見てもなかなかいい部屋ではあった。
（「ここなら当分一人暮しするにはちょうどいいかな…」）
「チエ、どうや。これなら文句ないやろ」
「だけど、テツ、こんな部屋どうやって見つけたん」
「ワシの知り合いに、アパート経営してる奴がおるんや」
「そんな人、ウチ聞いたことないで」
「ワシにもおまえには知らん世界があるんや」
「……」
隣近所の部屋を見て回るチエ。
「両隣の部屋に表札かかってないけど、誰も住んでへんのん？」
「ワ、ワシ、そこまで知らんわい」
「ゆうとくけど、テツは泊めたらへんで」
「アホー、おまえの部屋に泊りたなんかないわい」
「お母はんと二人であの家で暮らすんやで」
「分かってるわい…おまえこそ、男なんか連れこむなよ」
「ウチはそんな女とちゃう。それとも、そんな風に育てた覚えでもあるのん？」
「女が一人暮ししたいゆうのはたいていそういうことなんじゃ」
「ウチは違う…ただ正常な家庭を取り戻したいだけや」
「どういう意味じゃ」

「チエー」
「オバアはん」
「なんやー！　なんでクソババが来るんじゃー！」
（テツをどつきながら）「大きな声出しなはんな、体裁悪い」
「オバアはんにも部屋見てもらおう思たんや」
「わたい、物件の判断にはちょっと自信おますのや。若い娘の一人暮しですからな、しっかり用心せんと」
「なかなかええ部屋やろ」
（部屋を調べながら）「悪くない部屋ですな…隣の物音が響いたりしまへんやろか」
「隣、両方ともおらんみたい」

「でも、そのうちまた入ってきますやろ」
「あんた、この部屋どうやって見つけましたんや」
（「クソババ　クソババ　クソババ」部屋の隅でつぶやくテツ。）
「知り合いにアパート経営してる人がおるんやて」
「ヤクザどついて紹介させたんやおまへんやろな」
「ややこしいところやったらウチ止めるで」
「アホー、ちゃんと探したわい！　なんで部屋見つけたったのにボロクソゆわれなあかんのじゃ…」
「とりあえずここでいいかなあ」
「ええんやおまへんか。敷金と礼金はわたいの方で出しますさかい」
「ええねん。ウチこのために貯めてたお金あるから…。じゃあ今晩お母はんに相談して、明日にでも決めるわ」

西萩駅。
改札から出てきたマサルとタカシにテツが近づく。
「チエに部屋紹介しといたど」
「あ、ありがとうございました」
「おまえ、隣の部屋に入るつもりか」
「い、いえボクは別に…」
「まあ、入ったところでワシの目がある限りしょうもない真似はさせんけどな。じゃあワシは鍵もらうで」
「はい、これ…」テツに鍵を渡すマサル。

子分の猫A「怪しいな…あの二人何やっとるんや」
子分の猫B「大将に知らせといた方がええな」

テツが立ち去る。
「マサル…これでええんか」
「ええんや。オレの親戚にあのアパートの管理人がおってちょうどよかったわ」
「マサル、チエの隣の部屋に入るんか」
「そんなことしたら、オレ、ただのストーカーやんけ」
「じゃあ何のために…」
「そんなことより、今日はユキノブゆう奴見つけるんや」
「いっつも昼間になったらチエの店に来るみたいやど」

（「チエ…この世でオレ以上におまえのことを知ってる男はおらんのや…去年から知り合うた奴なんかにチエの何が分かるゆうんや」）

（「チエは、今まであまりにも不幸すぎたんや…オレがいっつも悪口ゆってたんも、おまえを励ますためやったんや…どんなことになってもオレがついてる、てホンマはゆいたかったんや…チエ、そのこと分かってくれ…」）

（「オレ、チエには不幸になってほしくないんや…チエがオレのこと受け入れてくれるんやったら、オレ、チエを幸せにするために何でもする…」）

その頃、*食堂* の中では…
「…それで、チエはユキはんに幻滅したゆうことですか」
「まあ、幻滅というか…」
「でも、その話ですと、ユキはんにとっては、テツは確かに正義の味方でっせ」
「そうかしらんけど、だからってテツにあんな態度取らんでも…」
「まあ、テツがどんな男かもっと分かってきたら、態度も変わってきますやろ」
「…それに、ウチ、ほんまはユキにヤクザの用心棒なんかやってほしないねん」
「ヤクザから庶民を守るんやから、別にええんとちゃいまっか…逆やと困りますけど。それに、血の気の多い時期やし、激しいこともしたい年頃なんですわ。男らしくてええやおまへんか」
「オバアはんは人のことやと思てるからそんなことゆうけど、ユキ、危ない目にもしょっちゅう遭ってる思うねん。ウチにはゆわへんだけで」
「別に人のことやとは思てまへんけど…。確かに心配ではありますわな」
「ウチ、自分の子供にはちゃんとした親の姿見せてやりたいねん。デタラメな親持つと子供が苦労するから」

思わずドキッとするオバアはん。
「で、でもユキはんは…わたいの息子みたいなデタラメな人やおまへんで」
「わからんで…昨日、その片鱗が見えたような気がするねん。テツに向かって一緒に組に殴りこみに行こうやなんて…」
「それはあんまり穏やかな話やおまへんな」

食堂の前の道路　　に立つマサルとタカシ。
タカシ（小声で）「ユキゆう奴来たど」
マサル「あいつか…」

ユキ、店の中に入っていく。
マサルとタカシがそのまま立っていると、15分くらいでユキが店から出てきた。
それを引きとめるように出てきたオバアはんを尻目に、怒ったように、足早に立ち去って行く。
中からチエの「ほっといたらええねん」という声が聞こえる。

「マサル…なんかあったんやろか」
「……」
呆然とユキの後姿を見送るマサル。

第七章

ひょうたん池。

ジュニア「…今のところ、オレのとこに入ってる情報はそれだけや」
小鉄「チエちゃんとユキがなんでケンカしたかは分からんのか」
ジュニア「怒った様子で店から出てきた日以来、姿を見せへんらしいわ」
小鉄「それでチエちゃん、今日からマサルの親戚がやってるアパートに泊るんか」
ジュニア「昨日荷物運んでたから、たぶんそうやろ」
小鉄「それで一方の隣の部屋の鍵をテツが持ってる、と。…中々ややこしい話やなあ」
ジュニア「オレ、今日からチエちゃんのアパートに泊りこむよ…なんかあったら困るからな」
小鉄「チエちゃんの部屋には入るなよ」
ジュニア（赤くなって）「当たり前やんけ。廊下で寝るんや」
小鉄「なんかありそうやったらワシにも知らせてくれ。行くから」
ジュニア「ああ…でも、もう無理したらあかんど」
小鉄「今回は暴力沙汰はないやろ…ちょっと見物したいだけや」

「見物？」
「今日は西萩小町見物や。おまえも見たら一目ぼれするど」
夜になると、*食堂「チエちゃん」*　にはこういう客が毎日何人かはやって来る。
勤め帰りの労働者やサラリーマンが「西萩小町」と評判のチエの姿を拝みにやって来るというわけだ。年配の客の中には、ヨシ江の姿目当てにやって来る者もいるが。
チエはホルモン焼き屋の頃から酔っ払いの相手には慣れていたが、露骨に関心を求めてくる客や下品な冗談には容赦しなかった。小学生のときのようにゲタや丸太ん棒を振るうことはさすがになかったが、手が滑ったふりをして…などということは相変わらず得意だった。
しかしここ数日は、何かいつもと様子が違う。
チエに媚びを振りまき、猥雑に騒ぐサラリーマンたちを相手にずいぶん愛想よく振舞うチエに、ヨシ江は一抹の不安を覚えた。
店が終わり、チエがすっかり酔いの回った客たちをにこやかに送り出した後、ヨシ江はここ数日間抱いていた疑問をとうとう口にした。
「チエ、最近ユキさんの姿見ませんけど、どうかしましたんか」
「別にどうもせえへん」
「…オバアはん、チエがなんか気に障ることゆうたみたいやてゆうてましたけど」
「なんや、聞いてるんや」
「詳しくは聞いてませんけど、ユキさん、なんか悪いことでもしましたんか」
「悪いことしてるかもしれへん」

「実際に見たんですか」
「見てへんけど、ウチに隠れてやってるんとちがうか」
「そんなことで、きつい言い方するのは感心しませんな」
「お母はんには分からへんねん。テツで慢性になってるから」
「もう、よろしいわ。でも、そんな言い方してたら、何にも解決せえへんのとちがいますか。
　…チエらしくないね、あんた賢い子やのに」
「悪かったね、ウチ、お母はんほどかしこないから」
今日は何を言っても無駄だ…と感じたヨシ江は、チエが後片付けを終えて、初めての一人暮しの部屋に帰っていくのを無言で見送った。

三階にあるチエの部屋の灯りがついた。
アパート の下から見上げるマサル。
チエの隣の部屋の鍵を片手に、階段をゆっくりと昇っていく。

チエの部屋の前に来た。何度かインターホンを鳴らそうとするが、その度にためらって止めてしまう。
しばらくドアの前で立ち尽くした後、隣の部屋のドアの前に行き、ゆっくりと鍵を差しこむ。
鍵を回す「カチャッ」という音が、やけに大きく、シーンとした夜の空気に響く。
そのとき、チエの部屋のドアが静かに開いた。

「…マサル？」
ドアから首を覗かせたチエが、数秒間の沈黙の後、大きく目を開いて驚いたように呟く。
「…あんた、ウチの部屋の隣に住んでるの？」
「…ああ、そうや。偶然やな」
頭の中が真っ白になったマサルが、反射的に答える。
「……ウチも、今日、越してきてん」
「そうなんか」
マサルはそう答えながら、心なしか、ほんのり紅く染まったチエの頬を、ぼんやりと見つめていた。
「…今、一人で引越し祝いしててん」
「へえ…一人で」
「ちょっと来えへん？」
マサルは、言われたことの意味が、すぐには理解できなかった。
なにかすべてが非現実的で、まるで夢の中にいるようだった。
「うん、じゃあ、行くわ」

自分でありながら、自分の声ではないみたいな気がした。

チエの部屋に入ると、六畳間の中央に置かれたちゃぶ台の上に、日本酒のワンカップ瓶と、つまみの載った皿が一枚置いてあるのが見えた。
「チエ…おまえ、酒飲んでるんか」
「店の残りモン、ちょっとだけもうてきた」
少し、けだるそうに答えるチエ。

そこにいたのは、マサルがかつて知っていた、髪に赤いポッチリを結わえ、ゲタを履いた、きびきびした少女でもなければ、去年の秋に食堂の中で凝視した、凛とした娘でもなかった。今マサルの目の前にいるのは、吸込まれそうな妖しい魅力を持つ、一人の艶やかな女だったのだ。

中学から私立の男子校に通い、ほとんど異性との接触のなかったマサルにとって、同じ年頃の女性の部屋に入るなどという経験はむろん初めてのことだったし、想像すらできないことだった。しかも、相手は、マサルがこの半年以上ひたすら想い続けてきた、いや、真実を言えば、小学生の頃からずっと求め続けてきた女なのだ。
マサルは、もう一度、自分が夢の中にいるのではないかと思い、できれば何かの方法で確かめたくなったほどだった。

「マサルも飲む？」
「オレ…オレ、ええわ」
入り口のところに突っ立ったまま答えるマサル。
「そう…」
「チエも、酒はまずいんと…」
「靴脱いで、入ってきたら？」
「…ほんまに、ええんか」
「ええよ」
ちゃぶ台の前に座りなおしたチエが、けだるそうに脚を横に投げ出す。

マサル、おずおずと部屋に入り、ちゃぶ台の、チエの向かい側に正座する。
「マサル、大学入ったん？」
「いや…落ちてしもた。今、浪人してる」
「なんで一人暮ししてるの？　家、この近くやろ」
「チエ…チエこそなんでこんな店の近くに…」
「お父はんが見つけてくれたんよ」
マサルの質問の答えにはなっていなかったが、それはお互い様だった。

また一口、ワンカップを呷った後で、チエが再び口を開いた。
「マサル、ウチのお父はんのこと知ってるやろ…。小学校の頃、よお馬鹿にされたもんね」
「いや、あの頃はオレ…」
「ええねん、もう気にしてないから」
「……」
「ウチのお父はん、まだあのまんまや…なんも変わってへん」
「……」
「マサル、なあ、昔、ウチに手紙くれたことあったやろ。ウチがテツみたいなんと結婚したら不幸になるで、て」
「…そんなこともあったかな」
「ウチも、ほんまにそう思うねん」
俯きながらつぶやくチエ。
なにかチエの心が、マサルから見ても不安になるほど、揺れ動いているのが分かる。
この瞬間、マサルは、なんとかしてやりたいと、心から思った。
しかし、どうすればいいのか、分からない。

チエが顔を上げた。瞳が潤んでいた。マサルは思わずどきっとした。
「マサル、ウチのこと好き？」

夜。*ひょうたん池*　から小鉄を背負って走るジュニア。
ジュニア「見物なんて悠長なもんやないど」
小鉄「どないしたんやジュニア、血相変えて」
ジュニア「とにかく急がんといかんねん。女の一生の問題なんや」
小鉄「女の一生て…チエちゃんがどうかしたんか」
ジュニア「乙女の貞操がかかってるんや」
小鉄「まさか、チエちゃんの部屋に夜這いに入るような命知らずな男が…」
ジュニア「それやったらまだええわ。オレがどついたらすむ話やから」
小鉄「違うんか」
ジュニア「とにかくオレ、一人やとどうしたらええかわからんのや…ここは一つ、その道の大ベテランの知恵を拝借して」
小鉄「おまえ、ワシのことまだ誤解しとるな」
ジュニア「オレ、一人でチエちゃんとマサルの濡れ場に踏み込む度胸ないからな」
小鉄「エッ！」
　　「ジュニア…それどういうことや」
ジュニア「訳は来て見たら分かる…オレ、おまえ背負って走りながら喋ってるから息切れてきたわ…とにかくマサルがチエちゃんの部屋に入っていったんや」
小鉄「そらえらいこっちゃ。なんやわからんけど、とにかく急いでくれ」

アパートのチエの部屋。
チエと向かい合って座っているマサル。
頬づえをついてマサルを見つめているチエ。
「オレ、オレ…チエのこと…」
想定していたあらゆるシチュエーションをはるかに凌駕する事態の展開に、マサルの頭脳はすでにオーバーヒートしていた。
目の前にいるのが、現実の一人の人間だという感覚がまだ持てず、まるで幻覚を見ているようだった。それはマサルが孤独な妄想の中で何度も作り上げた幻覚だった。
言葉が出てこない。ノートに用意してあった何千もの言葉は、この現実場面ではまったく無力だった。
「オレ、オレ…」

「ウチ、マサルがくれたノート、全部取ってあるんよ」
窮地に陥っているマサルを見て、チエが巧みに話題を変えた。
「この部屋にも何冊か持ってきたんや…キレイな言葉が書いてあるから」

押入れを開けて、奥からダンボール箱を取り出すチエ。
中から取り出した一冊のノートを広げ、中の頁に書いてある言葉を読み上げる。
折り目がついているところを見ると、何度も読み返したのだろう。

「真珠色の雲が散らばってる空に　誰か放した風船が飛んでいくよ
*　駅に立つ僕や人込みの中何人か　見上げては行方を気にしている*

*　いつか誰もが花を愛し歌を歌い　返事じゃない言葉を喋りだすのなら*
*　何千回ものなだらかに過ぎた季節が　僕にとてもいとおしく思えてくる*

*　毎日のささやかな思いを重ね　本当の言葉をつむいでる僕は*
*　生命の熱をまっすぐに放つように　雪を払い跳ね上がる枝を見る*

*　愛すべき生まれて育って行くサークル*
*　君や僕をつないでる緩やかな止まらない法則（ルール）*

*　神様を信じる強さを僕に　生きることをあきらめてしまわぬように*
*　にぎやかな場所でかかりつづける音楽に　僕はずっと耳を傾けている」（注）*

「…マサルて、詩人やね」
純粋に感動した様子で呟くチエ。そこには孤独に苦しむ男の自己満足的な妄想に向けられる、女からの皮肉や冷笑はなかった。それだけにマサルの胸にはこたえた。
（「それ…オレが作ったんとちがうんや」）
口に出して言いたかったが、そう言えるような雰囲気ではなかった。
でも、それ以上に、チエがマサルのノートを本当に読んでくれていたということが、なにか無性に嬉しかった。

それにしても、なんなんだろう、チエのマサルに対するこの好意と優しさは。
単に酔っているからというだけなのか。あのユキノブという男とは、やはりうまくいかなかったのだろうか。男とケンカして自暴自棄になっているのか。今、目の前にいるこのチエという女は、マサルの理解をはるかに超えた存在になっていた。
世界で一番チエのことを知っていると自負していた自分は何だったのか…
マサルは、自分の中の、チエに対するイメージを、今この瞬間、すべて白紙にしなければならないと悟った。

「オレ…、オレ、チエのこと幸せにしたいと思てる」
押入れの中の整理を始めたチエの背中に、マサルは思いきって語りかけた。
が、チエの怪訝そうな声がそれを遮った。

「マサル…さっきからなんか変な音せえへん？」
「え？」
「なんか人のイビキみたいな音…」
「そうかな…」
「なんか、ウチ、眠たくなってきたわ」
押入れを閉め、マサルの方に向き直り、襖に背中をもたれて、こっくりこっくりし始めるチエ。
「チエ…寝るんやったらフトン敷いた方がええんとちゃうか…」

夜道を走るジュニアとその背中の小鉄。
アパート が見えてくる。
小鉄「急げ！　おまえの働きにこの国の将来がかかってるんや」
ジュニア（ハアハア言いながら）「いらんこというな、足もつれるやんけ」
小鉄「間に合わんかったら取り返しのつかんことになるど」
ジュニア「ところで、おまえ、着いたらどうするつもりや」
小鉄「…それが問題やな」
ジュニア、思わずガクッとなる。
小鉄「ワシかて部屋に踏み込んでいく勇気ないで」
ジュニア「でも、窓から覗いてるだけやったらタダの変態やないか」
小鉄「まあ着いたらなんとかなるやろ」
ジュニア「大丈夫かなあ…オレ、なんかとんでもないもの目撃しそうで怖いんやけど」

「…おい」
前方に人影を認める小鉄。
「あれ、ヨシ江はんとちゃうか」
「え？」
「アパートの方に歩いていくど」
「チエちゃんの部屋に行くんやろか」
「ちょうどよかった。ヨシ江はんの後ついていこ」
「何がちょうどよかったじゃ…それやったらオレ、おまえ呼びに行くことなかったやんけ」

アパートの階段を上がるヨシ江。やや離れて後ろをついて行くジュニアと小鉄。

チエの部屋の中。
すっかり眠り込んでしまったチエ。
押入れを開けて、フトンを敷こうとするマサル。
「チエ…オレ、どうしたらええんや」
「…このまま泊まってもええんか」

かすかな寝息が聞こえるだけで、まったく返事がない。
「オレ…知らんからなあ。オレのせいとちゃうど…」

フトンを敷き、震える手でチエを横たわらせるマサル。
マサルにとって、初めて触れる女の身体だった。
初めて間近に見る、目を閉じ、上気したチエの顔。髪の匂い。柔らかな首と背中の感触ーーー
……
現実と妄想の境目が消え去り、マサルが理性を失いそうになったその瞬間、ドアをノックする音がした。
数秒間の沈黙。
再びノック。ドアの方に駆け寄るマサル。

マサルがドアを開けると、そこにはヨシ江が立っていた。

（注）『天使たちのシーン』（曲・詞　小沢健二　1993年『犬は吠えるがキャラバンは進む』収録）より

第九章

花井拳骨の家。

座敷で、花井と千春を前にして、ユキが正座している。
「どういうつもりや」
怒りを露わにした顔でユキを叱咤する千春。
「いつまでも愚連隊の真似事なんかしてて、チエちゃんに恥かしくないのか」
「…オレかて、好きでケンカしてるんやない」
「勝手なこといいなさんな」
「まあ、まあ、君にも言い分はあるやろ」
仲裁に入ろうとする花井。
「君は、将来なんかやりたいことがあるのか」
「法律の勉強して、できれば弁護士になりたいと思てます」
「それと、君の今の生活に、何か関係はあるんか」
「オレ、小さい頃から、親父が失業したり、借金のせいで家にヤクザが出入りしたり、世の中の嫌なことばっかり見てきました。強くなって、あいつらに仕返ししてやるんやてずっと考えてました。今やってるのは、その頃の復讐です。でも、これからはちゃんと勉強して、ホンマに悪いやつらと闘いたいんです」
「ロクに学校もいかんとケンカばっかりしてるんやから、ただのチンピラになるのがオチですわ」
「頼まれ仕事を引き受けてるだけや」
「何が仕事なもんか。仕事ゆうのはチエちゃんがやってるようなことですわ」
「ユキ君、どうや。ケンカ稼業は止めて、チエちゃんの店手伝うとか、なんか普通の仕事しながら、勉強を続けたらええんとちゃうか。そしたらチエちゃんも安心するやろ」
「今までオレが守ってた人らを見殺しにせえゆうんですか」
「あんたは警察やないんや。余計なことせんでよろし」
「いつまでも続けてると、ホンマに命の危険に遭うことになるぞ」
「殺られるのが恐くて、こんなことやってられませんわ」
「それやったら、チエちゃんはあきらめることや。
　あんたみたいな危なっかしい男にチエちゃんを関わらせたワタシがアホでしたわ」
「……」
「ワタシ、今日チエちゃん家に行って、ユキノブは遠くに行ってしもた、もう帰ってけえへんてゆうてきますわ」
「いや、その前にもう一回、二人で話させたったらええやないか。
　…それでお互いに分かり合えんようやったら、縁がなかったゆうことやろ」
ユキ、怒った様子で立ちあがる。

「なんやねん、さっきから聞いとったら、関わらせたとか話させたるとか…
　オレもチエもあんたらの道具やないんや！　自分らのことは自分らで決めるわい！」
「ちょっと待て、それは誤解や」
花井の言葉に聞く耳を持たず、立ち去るユキ。
「ワシ、ヨシ江はんに話するわ…ヨシ江はんやったら、なんとかできるかもしれん」
「ほっといたらよろしいんや。チエちゃんに迷惑をかけるくらいやったら、別れさしたほうがよろしい」
「…そういうわけにもいかんやろ」

ひょうたん池。
ベンチに寝転がるテツ。
「おもろない…おもろないど」
「ヨシ江の奴、ワシがあの部屋で寝てるの分かってしもたから、絶対呼びにきよるもんなあ…うっとうしいから、また家で寝るようなってしもたやんけ」
「ユキは、せっかく話わかる奴や思たら、あれからちょっとも姿見せよらんし…あいつと一緒やったら、ホンマに組つぶせる思たのに…」
「チエはチエで、すっかり陰気になりやがって…ワシ、最近あいつの側におったら気分沈んでくるもんな」
「あかん…なにもかもインケツや…あんまり退屈やから、就職でもしたろか」
「どうでもええけど、ワシ、この話の中で完全に脇役扱いやんけ…チエが子供の頃はワシ、主役のチエよりも目立ってたのに…」

小鉄「チエちゃん、あれからどうや」
ジュニア「ほとんど外出してへんみたいやな。自主的自宅謹慎状態や」
小鉄「あんまり漢字ばっかり使うな。…しかしよっぽどこたえたんやなあ」
ジュニア「チエちゃん、あの夜、酔いが覚めて起きた時、全然事態が把握できてなかったもんな」
小鉄「目が覚めたら自分の部屋の枕元にマサルとヨシ江はんが立ってて、寝る前の記憶がなくなってたら、そらパニック状態なるやろ」
ジュニア「チエちゃんて、酒呑んだら男に対して完全に無防備になるんやな」
小鉄「この先、不安やなあ…」
ジュニア「でも、チエちゃん、もう一生酒は呑まんてヨシ江はんに誓ってたで」
小鉄「でも、あの様子やと、マサルは何もしてないみたいやな」
ジュニア「マサルにそんな根性ないよ」
小鉄「いや、でも、ああいうタイプは、一回ネジが外れると、とことんまで行ってしまうんや」
ジュニア「確かにあいつ、昔からチエちゃんのことなると狂気じみたとこあったからな」
小鉄「チエちゃん、マサルに会いたないから表に出えへんのやろ」

ジュニア「そういうわけでもないみたいやで…」

その頃、チエは自宅で、自己嫌悪に陥っていた。
ユキとのケンカ。一人暮しをして最初の夜にアパートの部屋で演じた失態。マサルとの関係。その他、色々なことがごちゃごちゃになって、チエの心をバラバラに引き裂いていた。
あの夜、ヨシ江があのタイミングで部屋を訪ねることがなかったら、と思うと、チエはもう自分が信じられなくなるのだった。あの夜、ヨシ江は、チエが覚えている限り生まれて初めて、チエを厳しく叱った。マサルはチエの隣で呆然としていた。チエは、自分に腹が立ち、情けなくなって、泣いた。

夜遅くになってもテツが帰ってこないのを不審に思ったヨシ江が、チエのアパートを訪ねたとき、テツはチエの隣の部屋で寝ていた。聞こえてくるイビキで、テツがいることを知ったヨシ江は、次の日からテツを呼びに来るようになった。ヨシ江がテツを家に呼び寄せる態度には有無を言わせぬものがあったので、テツは観念してその部屋を使わないようになった。マサルは、隣の二つの部屋の鍵を返して、二度と使わないことを誓った。

チエは、せっかく借りた部屋ではあったが、次の日にアパートの荷物を引き上げてしまった。ヨシ江にそうするよう言われたわけではなかったが、チエ自身、そうしなければ気持ちが収まらなかったのだ。
その日、荷物を運ぶのを、マサルも手伝った。そうせずにはいられなかったのだ。しかしその日、マサルとチエの間に、会話はなかった。タカシには、お互いが目を合わせるのさえ避けているように見えた。マサルは何があったのか決して言おうとしなかったので、タカシは、マサルとチエの態度から、二人の間に何かひどく気まずいことがあったのだと思った。

その日から、マサルは毎日、チエの店に通うようになった。とは言っても、食事をしに行くわけではない。店を手伝うようになったのだ。
不器用な手つきで皿を洗ったり、ぎこちない動作で床を掃除したりするマサルは、チエにとっては、決して手助けになる存在というわけではなかったが、是非にと頼まれると、積極的に拒む理由も見出せないのだった。

あの夜の落ち度は、どちらかと言えば、誘ったチエの方にあると思っていたので、チエはマサルに対して後ろめたい気持ちがあった。マサルにはマサルで、チエに対して何らかの誠意を見せたいという気持ちがあった。それに、酔った上でのこととはいえ、チエの態度が、自分に対する正直な気持ちの現われではないかという思いも捨てきれなかったのだ。そして何よりも、マサルは純粋に、あの夜自分に垣間見せた、チエの痛んだ心を癒してやりたいと思っていたのである。

そんな数日間が過ぎていくうちに、チエとマサルの間には微妙な心の交流が生じつつあった――

ー

「マサル、あんた浪人中やろ。受験勉強せんでええの？」
店の準備をしながらチエが声をかける。
「ええねん。オレ、勉強は夜にやるのが一番はかどるんや」
「昔もそうやったもんね。ウチの悪口、夜も寝んと必死で考えてたやんか」
「コーヒー、魔法瓶に何杯も飲んで、胃ィ壊したこともあったもんな」
「ウチとヒラメちゃん主役にして劇書いたときも、徹夜でフラフラやったやん」
「あのときは、本番中におまえにどつかれてメチャメチャにされたなあ」
「あんたが本気でどついたからやんか」
昔のそんな出来事を冗談めいて話せるほど、二人はもう大人になっていたのだろうか。笑い合う二人の笑顔には、まるで屈託がなかった。

「…オレ、小学校の頃、チエがいるから勉強する時間がないんやと思てたけど、そんなことなかったんや」
「マサルは勉強せんでもできたから」
「オレ、中学に入って、おまえがおらんようなったら、途端に何にもできへんようなってしもた」
「ウチに悪口言われへんようなったからやろ？」
「…」
「正直に言いなさい、マサル君」
「…そうです」
笑い合う二人。

「でもなあ、人間て、何にも思てへん奴の悪口てあんなに考えられるもんかな」
「？」
「思うんやけど、オレ、ホンマはあの頃からチエのこと…」
「あ、そろそろ店開ける時間や。マサル、掃除おおきに」
慌てて話題を逸らそうとするチエ。

それでも、小さく呟くマサル。
「…好きやったんとちゃうかなあ」

第十章

難波駅。

駅ビルの中にある通称「ロケット広場」は、待ち合わせの場所によく使われる。
休日の午前中ともなると、これからデートに出かける恋人たちや遊びに行く友人たちが、わいのわいの賑やかに談笑して華やいだ雰囲気だ。

ここにもまた、恋人を待つそぶりの男が一人。ひっきりなしに腕時計を眺めながら、そわそわ落ちつかない。もう３０分以上この状態だ。
やがて、ついに、雑踏の中からやって来る待ち人の姿を発見し、男の顔に思わず笑みがこぼれる。

「マサルー！　ごめん、待ったやろ？」
「いや、今来たとこや」
「久しぶりにこんなとこ来たから、どこがどこか分からんで、迷ってしもた」
初めて見る、チエの華やいだ格好に、しばらく目を奪われたあと、マサルはできるだけクールに言葉を返した。
「オレは、このへんは毎日通ってるから」
「マサルの予備校て、この近くにあるん？」
「ああ、こっから五分ほどや」
「それで、今日は、どこ行く？」
「そうやなあ…とりあえずどっかでお茶でも」
もちろん、前々から、今日の行動計画は綿密にシュミレートしてある。
近くのファーストフード店に入り、予定していたいくつかの席のうち、空いている場所に座る（もちろん、どれも空いていなかった場合の対処法も考えてある）。

例のアパートでの出来事があってから、落ちこんで家の中に閉じこもりがちだったチエを、ミナミに遊びに行くまでに回復させたのは自分だと、マサルは密かに自負していた。店を手伝うようになってしばらくしてから、マサルが熟考の末に繰り出したデートの申し出を、チエはあっけないほど素直に承諾したのだ。

「ウチ、難波に来たのなんて何ヶ月ぶりやろ…それに、前来たときは高校の陸上部の人らと一緒やったから、あんまり自由に歩き回られへんかったんよ」
窓の下を通りすぎる人込みを物珍しそうに眺めながら、目を輝かせているチエ。
「こんなに近くに住んでるのに、西萩の町からほとんど出たことないんやな」
ついつい癖で嫌味な口調になってしまうマサルだが、悪気はないので、チエもあまり気にしてい

ないようだ。

「でも、二人なんかでここに来たのはホンマ初めてや。お母はんとも、ヒラメちゃんとも…。あ、そういえば、ヒラメちゃんから葉書届いてん」
肩からぶら下げたポシェットから一枚の葉書を取り出すチエ。
「ほら」
そこには、いかにもヒラメらしい、細密画のように細かなデザインの模様が描かれていた。しかし、それはよく見ると、東京の街並みなのだった。
「ヒラメちゃん、東京タワー上って、そこから見た景色描いてんて」
無邪気なほど明るく説明するチエ。
「…でも、その葉書、ヒラメからチエに来たんやろ」
「そうや」
「オレ、見んほうがええんとちゃうかな」
「なんで？」
「だって、ヒラメ、オレに見られた思たら嫌がるで、たぶん」
「そんなことないわ」
「ヒラメ、オレのこと嫌いやんか」
「そんなん、昔の話やん」
「そうかな…それに、オレとチエがこんな風に会ったゆうのも、知らせんほうがええのとちがうか」
「なんか、マサルの考え方、おかしいわ」

ずいぶん変わったな…そんなに何もかも昔のことと思って洗い流せるもんかな…と不思議な気持ちはしたが、目の前のチエが、過去のことにこだわらず、サバサバしているのは、マサルにとってとても有難かった。

店を出るとき、マサルはすかさずレジに突進した。「オレが払う」という意思表示のつもりだったのだが、後から伝票を持ってやってきたチエが、「今日は割り勘やで」と言いながらあっさり二人分払ってしまった。
「マサル、今日は気ィ遣わんといて。ウチ、ようけ持ってきたから」
「悪いな…」

駅を出て、ミナミの繁華街を歩き出す二人。
燦燦と降り注ぐ初夏の日差しの中で、ヨシ江に洋裁を教わりながら自分で作った白いワンピースを身につけ、白い帽子をかぶった、チエの姿が眩しい。
「マサル、今日はウチ、どこでも付き合うで」
「分かった。じゃあ、まず…」

マサルの練り上げた行動計画を順調にこなしていく二人。今日は徹底的に楽しもうと決めているらしいチエは、どこに連れて行っても、素直に感心し、素直に喜ぶ。それは、どこにでもいる、18歳の少女そのものだった。
しかし、チエが、普通の少女のように無邪気に振舞えば振舞うほど、生活に追われるように毎日働き続ける普段のチエの姿がそれに重なって、マサルはなぜかチエが不憫にすら思われてくるのだった。

かく言うマサル自身も、この歳になるまで、年頃の女性とデートしたことなど一度もなかった。デートの約束をした日から今日まで、ほとんどまともに眠った夜はなく、鏡の前で何度も自分の姿勢や表情を研究する日々が続いた。会話や仕草の詳細まで徹底的に考え抜かれたマサルの物腰は、一見、自信と余裕に満ち溢れているように見えた。

どこにでもいるようで、どこにも決していないだろうこの若い二人のデートは、夕方までスムーズに進んだ。マサルの事前の行動予定は、割り勘という一点を除いては完璧だった。
そしていよいよ、今日のメインイベントである、夕食の時間に入る。
「…そろそろお腹空かへんか」
「そうやな…なんか食べよか」
「なんか食べたいモンあるか」
「別に…なんでもええわ。ホルモン以外やったら」
「じゃあ、寿司なんかどうや」
「えー？　すごい高そうやん…でも、ええで。今日はウチ、太っ腹やから」
「このへんに、美味いとこあるんや。前、家族で食いにきたんや」
「行こ行こ」

道頓堀にある、高級そうな寿司屋。
マサルは、店に入ると、カウンターの真ん中に陣取った。
慣れた様子でいくつかネタを注文するマサル。
チエは、店の雰囲気に圧倒されて、目を丸くしながら、ただ押し黙っていた。
「マサル、こんな店によう来るの？」
「たまにやけどな」
「ウチ、あんまり高級そうな店て好かんけど、いっぺんくらい経験しとくのもええかな…でも、これっきりでええわ」
「まあ、今日は特別や。ここはオヤジのツケが効くから、値段は気にせんでええで」
「そんなん、悪いわ。ウチ、後で絶対払うから」
「なんか飲むか」
「お茶でええわ」

「酒はええんか」
「あかん！　酒は絶対にあかん！」

「ところで、チエ…こないだの話やけど…」

ここで、今日一番大事な話を持ち出すのがマサルの予定の行動だった。
しかし、そのとき、店の入り口の方から、数人の男たちの荒荒しい声が聞こえてきた。
やがて声は近づいてきて、黒い背広姿のいかにも「それ風」の男たち３、４人がマサルたちのいるカウンター席についた。
最初は少し離れたところで飲み食いしていたが、だんだんチエたちの方に移動してきた。そのうち、明らかにチエに向かって目線や仕草で合図を送ってくるようになった。チエはずっと無視していたが、男の一人が酔った勢いでチエの隣に座ってくると、もう黙っていることはできなかった。

「オッさん、何するんや」
「なんや、活きのええお嬢ちゃんやないけ」
「ウチ、女や思てなめとったらあかんで」
マサル、思わず止めに入る。
「チエ、やめとけ」
「なんやお嬢ちゃん、チエゆうんか」
残りの連中がやって来た。
「ちょっと顔かせや、おい」
店の職員たちは、関わりにならないように遠くに行ってしまっている。
「マサル、あそこにある棒取って」小声でチエが囁く。
「やめといたほうがええて」
「早よ！」
チエは身体に触れようとする男からひらりと身をかわすと、カウンターの脇に置いてあった木の靴箆を掴み、男の顔面を殴った。
「なにするんじゃコラー！」激昂してわめく男たち。
「マサル、逃げるんや！」
チエは巧みに身をかわして、男たちの輪から抜け出したが、マサルはチエが殴った男に捕まってしまった。

「あんたら、なにするんや！　ちょっと店の人！　何してんの！
　じっと見てんと、助けんかいな！」
叫びまくるチエ。
３人の男たちが椅子を投げて暴れだし、店内が一気に騒然とした。

マサルは男に羽交い締めにされている。
椅子をつかんで男たちに飛びかかるチエ。それを止めようとする店員。その店員を引き倒すチエ。
「くそー！」
羽交い締めにされた男の手に噛みつくマサル。
「警察や！　警察呼べ！」
店全体がパニック状態と化す。逃げ惑う他の客たち。

そのとき、店の入り口から男が駆け込んできて、チエにつかみかかろうとしたヤクザに蹴りを入れた。
一斉に躍りかかる他の３人のヤクザとその男が乱闘になる。
「ユキ！」
チエが叫ぶのを聞いて、男たちの顔が強張った。
「おまえら、どこで暴れてる思とるんじゃ！　ヤクザは隠れて大人しいしとけ、ドアホ！」
一気に攻勢に転じたユキは、三人の急所に拳で一撃を加え、蹲る男たちにさらに蹴りを入れた。
「ユキ、もうええわ、そこまでやらんでも」
止めに入るチエ。
顔面蒼白で立ち尽くすマサル。
店の通報を受けた、制服の警察官たちが入ってきた。

＊　＊　＊

ミナミの派出所の前。
参考人として事情聴取を受けた、チエ、マサル、ユキの三人。
チエとマサルはその場で釈放されたが、ユキは一晩拘留されることになった。
もうすっかり夜は更けていた。

「さんざんな寿司やったな…」
「…ごめんな」
「チエが謝ることない」
「でも…」
「…あいつ、普段からようケンカしてるのか」
「本人いわく、ケンカのプロやて」
「プロて…ひょっとしてヤクザ…」
「そうゆうんとは違うけど」
「ようわからんけど、まあええわ。助けてもろたんやから、お礼せんとな」
「…マサル、今日は悪いけど、先に帰ってくれる」

「…チエは、どうすんねん」
「ウチ、ここでユキのこと待ってる」
「朝までか」
「うん」
「……」
「マサルの分も、お礼ゆうとくから」
「チエが待ってるんやったら、オレも待つよ…オレもちゃんと礼言いたいし」
「……」
「それに、チエだけこんなとこで朝まで過ごさせるわけにいかんからな」
「ウチ、ちょっと家に電話してくるわ」
電話ボックスに向かって歩いていくチエ。
道頓堀のネオンサインをバックに、複雑な表情で立っているマサルの姿。

＊　＊　＊

食堂「チエちゃん」。
奥の座敷に座っている、ヨシ江と花井拳骨。
二人は、難波に行って来るといって出かけたきり、夜遅くになっても戻ってこないチエの帰りを待っている。

お茶をすすりながら花井が口を開く。
「チエちゃん、近頃ようこんなことあるんか」
「いえ…今まではこんなことする子やなかったんですけど…」
曇った表情のヨシ江。
「なんか、聞くところによると、最近マサルゆう子が店に来てるらしいやないか」
「昼間、店の手伝いに来てるみたいですわ」
「今日は、マサル君と会っとるんやないか」
「…そうですやろか」
「彼とケンカしてから、ちょっと不安定になってるんとちゃうか」
「……」
「いや、ワシが今日来たのも、実はそのことなんや」
「……」

花井は、先日の、千春とユキとの会話の内容をヨシ江に伝えた。
「チエちゃんもやっぱりヨシ江はんの子やなあ」
「え？」
「テツみたいな奴、好きになるんやなあ」

「何ゆうてはるんですか、センセ」
「でも、チエちゃんはテツで苦労しとるからなあ。自分の子供には同じ苦労させたないんやろ。その気持ちはワシも確かに分かるんやけどな。ただ…」

電話が鳴った。

第十一章

ヨシ江が電話を取ると、チエの声がした。
「お母はん？　ウチ、今まだ難波やねん。ちょっと事情があって、今夜は帰られへんから」
「事情てなんですか」
「話すと長なるから、帰ったらゆっくり説明するけど、今、ユキが警察におるねん」
「！？」
「明日の朝には出れる思うねんけど、ウチ、それまで待ってるから」
「チエ、場所はどこですか。お母はん、今からそこに行きますさかい」
「…心配せんでも、大丈夫やから」
そこで電話が切れた。

花井「なんや、チエちゃん、まだ難波におるんか」
「ユキノブさんが警察におるとかゆうてましたけど」
身支度を始めるヨシ江。
「場所は分かるんか」
「言いませんでしたけど、探したら分かりますやろ」
「待て、ヨシ江はん、ワシも行くわ…そうや、こういうときにこそ役に立ってもらわんと」
「？」
「テツー！　起きんかい！　チエちゃんが大変なんや！」
階段の下から二階に向かって叫ぶ花井。
「センセ、わたし、起こしてきますわ」
「いや、ヨシ江はん、出かける準備しといてくれ」
二階に駆け上がる花井。
ヨシ江の頭上で天井から声が聞こえる。
「こらー！」
「なんやー！　なんで花井がここにおるんやー！」
「ちょっとワシと一緒に来い！」
「ヨシ江ー！　助けてくれー！」
「おまえもたまには父親らしいことせえ！　チエちゃんが大変なんや！」
「チエが？！」

真夜中。西萩駅のホームに立つ、花井とヨシ江とテツ。
「…懐かしいなあ。三人で一緒に出かけるなんて何十年ぶりやろ」
「そうですなあ」
「どうでもええけど、こんな時間に、もう電車ないど」
「次の電車が最終ですわ」

「行くのはええけど、どうやって帰ってくるんや」
「明日の朝帰ってきたらええんや」
「ところで、ワシらどこ行くねん」
「警察や」
「警察！」
「チエちゃん、今、難波の警察におるんや」
「！！　あいつ、とうとう…」
「センセ、そんな言い方したら、この人誤解しますがな」
「ヨシ江ー！　ちゃんと説明せえ！」
電車が来た。

道頓堀を歩く三人。
「こんなとこ、ただうろついとってもなんも分かるかい…警察のことやったらミツルに聞いたらええやないか」
「ブツブツゆうな。目指すはミナミの派出所や」
「ワシ、ヤクザみつけたらどついて聞き出すからな」
「いらんケンカすなよ」
「…あそこと違いますか」
ヨシ江が指差した方向に派出所の灯りが見えた。

派出所からユキを連れて出てくる花井とヨシ江。
「ワシの知ってる男でよかったわ。彼、朝子はんが警察でラグビー教えているときの知り合いやったんや」
「…申し訳ないです」
俯いて詫びるユキ。
「事情はだいだい分かりましたけど…店の中にチエたちがおるゆうの知ってましたんか」
「ケンカみたいやったから飛び込んだだけです」
「今回はたまたまええとこに飛び込んだけど、君も危ない奴やなあ」

少し離れた場所で待っていたテツ。
「アホが…警察の世話なんかなりやがって」
「…スンマセン」
「チエはどこにおるんや」
「オレは何も…」
「おまえ待ってるからてチエから電話あったんやど」
「！」
「探して、チエどこにおるか見つけて来い」
「分かりました。…このへんで一晩中開いてる店、片っ端から当たってみますわ」

「…ワシ、暇やからヤクザでも探して遊んでよ」

さて、その頃チエとマサルは…

深夜の喫茶店。　甲高いBGMが大音響で流れている。
「ウチ、なんかこうゆう雰囲気好かんわ」
「じゃあ、すぐ出よか」
「うん、コーヒー一杯だけ飲んだら出よ。もう頼んでしもたから」
「オレ、ワイン頼むで」
「マサル、お酒飲めるのん？」
「の、飲めるわい。ワインは色々銘柄によって味に違いがあって…」
本で読んだ知識を披露するマサル。もちろん飲んだことはない。

BGMが明るい軽快な曲に変わる。
「マサル、大丈夫？　なんか顔真っ赤やけど」
「大丈夫、大丈夫や。まだ一杯しか飲んでないから」
「でも、なんか変な気分やな…こんな時間にこんなとこで二人でいるの」
「オレ、なんか今、すごい楽しいわ。チエはどうや」
（ちょっと考えてから）「ウチもや」
「昔も、オレ、チエと一緒にいるとき楽しかったけど、今のほうがずっと楽しいねん」
「？」
「今は素直に楽しいんや」
「昔はひねくれてたん？」
（笑いながら）「ハハハ、昔はひねくれとったな」
「やっぱり！」
「オレ、もう一杯頼むわ」
「大丈夫？」

BGMが哀しげなバラードに変わる。
「オレ、昔、チエにひどいことばっかりゆうてたなあ」
「いまさら何ゆうてんの」
「でも、悪う思わんといてくれ。オレ、あの頃はああ言うしかなかったんや」
「？」
「チエに近づくためにはああするしかなかったんや」
「……」
「ゴメン…オレ、自分でもアホやと思てる」
「マサル…ひょっとして泣いてるんとちゃう？」

「オレ、ホンマにアホやった…オレなんか、チエに比べたら…」
「マサル、もう飲まんほうがええわ」

BGMが甘いメロディアスな曲に変わる。
「チエ…こないだ部屋の中で、オレ、おまえのこと…」
（席を立ちながら）「さあ、そろそろ出よか」
「オレ、いっつもおまえのことばっかり考えてる」
（赤くなって）「あんまり恥かしいことゆわんといて」
「オレ、いっつもチエのこと…」
（「あかん、悪酔いしてる…」）
「ええかげんにせな、ウチ一人で出るで」
「チエ…」
マサル、椅子に座ったまま眠り込んでしまう。
「困ったな…」

しばらくチエが途方に暮れていると、店の入口の方から声が聞こえた。
「チエ！」

「…ユキ！」
「迷惑かけたな」
「もう出てこれたん？」
「ああ…みんなチエのこと探してるで」
「みんな？」
マサルを背負って、チエと一緒に店を出るユキ。
店の外には、ヨシ江と花井が待っていた。
「お母はん…。花井のオッちゃんも…」
「お母はんやないですわ。心配しましたで」
「やっぱりマサル君も一緒か」

「あれ？　テツさんは？」
ユキが不思議がる。
「知らん。道頓堀にでも飛び込んだんとちゃうか」
「？」

道頓堀をニコニコしながら歩いているテツ。
「たまには知らんとこ来るのもええもんやなあ。ワシの顔知らんヤクザけっこうおるから、どつき放題やんけ。チンピラのくせにやけに羽振りええから、けっこう金持っとるし…ワシ、当分こ

こに引っ越そかな」
「しかしユキて結構有名な奴なんかな…ワシがあいつの名前出したら、びびっとったもんな」
「！」
チエたちの一行を発見する。

「おーい！　チエ！」
「なんや、テツも来てるんか」
「ワシなあ、さっきから、何人もヤクザからおみやげもうてなあ…」
「いらんケンカすなゆうとるやろ」（テツをどつきながら）
「クソー…花井もおったん忘れとった」
「ここにはミツルのオッちゃんおらんのやで。しょうもないことしたら即ブタ箱行きやど」

コソコソとユキに近づきながら囁くテツ。ユキはまだマサルを背負っている。
「おい、おまえ、このへんのヤクザどつきまわっとるんやろ」
「別にどつきまわってはいませんけど…たまにトラブルがあったときは」
「ワシにも手伝わせえ」
「いや、オレはもう…」
「なんや」
「今日、留置場の中で考えたんですけど、オレ、こういうこと、もう止めようか思うんですわ。いつまでも今みたいな暮らしするわけにもいかんし、もうちょっとまともな…」
「アホー、おまえ、一回放りこまれたくらいで何弱気なっとるんじゃ」
「そろそろ足洗う時期かな、と思いまして…」
「ワシを見習わんかい、ワシを。正義の味方は、普通の生活を犠牲にせな、つとまらんのじゃ」
「でも、オレ、やっぱりチエさんに迷惑かけるようなことは…」
「チエにはワシの方からちゃんとゆうといたるわい」

「あの二人、何話してるんやろ」
後ろを振り返り、少し遅れて歩きながら話しこんでいるテツとユキを見やるチエ。
並んで駅まで歩いているチエ、花井、ヨシ江の三人。
「まあ、放っといたれ。男同士、話したいこともあるやろ」
「男同士で話すことなんて、たいていロクなことちゃうんよね…」
「そうゆうな。それより、マサル君大丈夫か」
「酔っ払って寝てるだけやから、大丈夫やろ」
「チエ、あんた、まさか…」ヨシ江が怪訝な顔をする。
「飲んでへん！　ウチは飲んでへん！　それにウチが飲ませたんやない！」
あせりまくって否定するチエ。
「チエちゃん、なんでそんな必死になるんや。酒のことでなんかあったんか」

「別に何も…」冷や汗を流しながら誤魔化す。
「ヨシ江はんも、酒呑んだら人格変わるからなあ」愉快そうな花井。
「センセ、もう、そういう話は…」
「ええやないか。チエちゃんもやっぱりヨシ江はんの子供なんやから」
「やっぱり、てどうゆうこと？」
「ヨシ江はんと男性の好みが似とるゆうこっちゃ」
「どういう意味や。…ちょっとも似てへんやん」ちょっと赤くなるチエ。
「チエちゃんは、彼にはどうなってほしいんや」
「！？」
チエは、いきなり来た質問に不意打ちをくらい、何と答えていいか分からない。
「ケンカは止めて欲しいか」
「……」
「今日みたいなケンカもあかんか」
「……」
「どうや、もう一回、二人でゆっくり話し合ったら」
「……」
考え込むチエ。
その横顔を見つめるヨシ江。

チエとヨシ江、二人の肩越しに、テツと一緒に歩くユキと、ユキに背負われて眠っているマサルの姿が見える。
道頓堀のネオンサインが、夜明けの光と共に、薄く、淡い色に変わっていく。

第十二章

河会塾難波校の屋上。

金網の向こうの街を眺める男二人。

「マサル…今日もチエのとこ行くんか」
「ああ」
「チエに、店に働きに来いて言われてるんか」
「アホ…ちがうわい。そうせなオレの気がすまんのじゃ」
「でも、いつまでそんなこと続けるんや」

遠くを見つめながら、独り言のように呟くマサル。
「…ひょっとしたら、オレ、あの頃に戻りたいのかなあ」
「？」
「…オレ、なんか、チエと過ごしたあの小学校の一年間に、何十年分も生きたような気がするんや」

電車を下り、改札を通り、西萩の駅前に降り立つマサルとタカシ。そのまま*食堂「チエちゃん」*に向かう。入口の戸が少し開いている。
中から人の声がする。外で立ち止まり、耳を傾ける二人。

「オレかて、ケンカなんか、やりたくてやってるんとちゃうんや」

（「なんや、ユキが来てるんか…」マサル、心の中で呟く。）

「じゃあ、難波で店に飛び込んできたのはなんでやのん」
「あれはチエが危ないと思ったから…」
「ウソばっかり。ケンカや思たから飛び込んできただけやんか…まあ、助けてくれたことには感謝してるけど」
（「こないだの話か…」）

「とにかく、オレ、ケンカ稼業から足洗おう思うねん。せやから…今日からここで働かせてくれへんか」
（「！」）
「…働くのはかまへんけど、テツとはあまり話したらあかんで」
「なんでや」

「どうせロクな話せえへんやろ」
（「働くのはかまへんて…オレはどないなるんや」）

「チエ、そんなにテ…、お父はんのこと嫌いなんか」
「好き嫌いの問題やない。ウチ、ユキにはデタラメな大人になってほしないねん」
「なんや、おまえ、オレの保護者みたいなこと…」
「テツみたいなんは一人で十分や」
「テツて、おまえ、さっきからお父はんのこと呼び捨てに…」
「最近、テツ、ウチに変なことばっかりゆうねん。男のケンカを邪魔したらあかんとか、就職するような男はカスやとか…。ユキがテツにいらんこと話したからとちゃうか」
「別にオレは…」
（「なんや、完全にチエのペースやんけ」小声で囁くタカシ。）
（「でも、話の方向性はまずいなあ…」不安になるマサル。）

マサルが店に足を踏み入れるべきかどうか、ためらっていると、不意に後ろから肩を叩かれた。
振り向くマサル。
「！」
「こら、おまえら、こんなとこで何しとるんじゃ」
「お、おまえ、コ、コ、コケザル！」
「ニワトリかおまえは！　おまえ、まだチエにちょっかい出しとるんか！」
「それはこっちのセリフや！」
マサルも負けずに言い返す。

「誰や、大きな声出して」
二人の大声を聞きつけたチエが、店の中から顔を出す。

「！！！」
「チエ、久しぶりやんけ」
爽やかに声をかけるコケザル。
「な、なんやあ…」
「チエ、オレはどうしたらええんや…」
哀願するように訴えるマサル。うろたえるタカシ。
「ちょっと…あんたら…」

＊　＊　＊

「『…ウチは日本一わけのわからん男らを引き寄せる少女や』てゆうてたんとちゃうか」

ひょうたん池の定位置に寝そべりながら、ジュニアの報告に耳を傾ける小鉄。
「まあ、それに近いことは…」
「ほんで、コケザルは何しに来たんや」
「就職が決まった、てチエちゃんとヨシ江はんに知らせにきたみたいやで」
「コケザルと就職…似合わん言葉やなあ」
「キタの寿司屋に住みこんで板前の修業やて…千春はんに世話してもうたみたいやな」
「板前か…想像しにくいけど、似合うてると言えなくもないかな」
「まあ、続くかどうかわからんけど…コケザル、ああ見えて根性あるから、とりあえずやりよるんとちゃうか」
「チエちゃんとユキは仲直りできたんか」
「ユキが店一緒にやることにはなったみたいやな」
「一緒に暮らすんか」
「いや、ユキはチエちゃんが前に借りたアパートで一人暮ししとる」
「それで、マサルは？」

＊　＊　＊

「オレ…もうチエの前には二度と現れへんから」
西萩の駅。改札口の前に立つマサルとチエ。
「ウチ、マサルと一緒に行く」
「やめとけ。おまえは、あの男と一緒になるのがええんや」
「ウチ、昨日の夜、一晩中考えてん。ウチ…ウチ、やっぱりマサルのことが一番好きや」
「おまえとオレとは、住む世界が違うんや。一緒にはなられへんのや」
「なんで？」
「オレは、医学部に入って、親父の診療所継がないかんのや。おまえは、一生ホルモン焼いて生きるのが一番幸せなんや」
「ウチ、マサルと一緒になれるんやったら、店なんかやめる」
「オレかて…オレかて、ずっと、一生、チエとこうやって話したい思てるよ…せやけど、あかんのや。悪いけど、オレのことはあきらめてくれ」
チエに背中を向け、改札を入るマサル。
「マサル、待って！　行かんといて！」

（「振り返ったらあかん、振り返ったら…」心の中で葛藤するマサル。）
（「ここで振り返ったら、また未練が残る…」）
（「でも…」）

「小林！」

「マサル！」タカシに肘でつつかれ、目を覚ますマサル。
（寝ぼけ眼で）「は、はい！」
「眠るくらいやったら、授業に出んでもええぞ」
「…すみません」

予備校を出るマサルとタカシ。
「マサル、チエの店に行かんようなってから、またなんか調子悪いな」
「うるさい」
「やっぱり、もうチエのことは忘れて…」
「いらんことゆうな。おまえにオレの気持ちが…」
「マサル、あ、あれ！」

タカシの指差した方向を見ると、駅のベンチに、ボロボロになったユキが座っていた。

＊　＊　＊

ユキのアパート。
「…おまえ、ホンマに大丈夫か」
ユキを二人でアパートの部屋に運び、フトンに寝かせたあと、心配そうに語りかけるマサル。
「ああ、すまんかったな…あとは一人でなんとかなるやろ」
「医者呼んだ方がええんとちゃうか」焦り気味のタカシ。
「…ケンカしたんか」
「まあ、そんなとこや」
「チエ、呼んでくるか」
目を閉じ、黙って首を横に振るユキ。
マサルも、それ以上は何も言わなかった。
この姿をチエに見せたくないというユキの気持ちを察したからだ。

「マサル、それじゃ、オレらもうそろそろ…」
「おまえはもう帰ってええわ。オレ、もうちょっとここにおるから」
「そうか…じゃあ、オレはこれで」
部屋を去るタカシ。

ユキと二人きりになったマサルは、部屋の中をつくづく見渡した。
初めて見るユキの部屋は、必要最低限のものしかない、実に殺風景な空間だった。部屋の隅にある古い勉強机の上には、法律の本が数冊と、赤いペン字で埋め尽くされた、広げられたままの大学ノートに、使い古した六法全書が置かれていた。

つい先日、この同じ部屋で起きた出来事を考えると、マサルの胸には何とも言えない感慨が襲ってくる。

「…じぶん、マサルてゆうんやろ」

眠っていると思ったユキが、静かに口を開いた。
「…そうや」
「チエと同じ小学校やったんか」
「ああ」
「チエは、小学校のとき、どんな子やった」
「……」
「たのむ、教えてくれ。オレ、知りたいんや」
「…えらい奴やったで」
「……」
「あの頃から一人でホルモン屋やっとったからなあ」
「……」
「学校ではよう居眠りしとったけど、体操は抜群でなあ。オレ、運動音痴やから、うらやましかったわ」
「いじめられたりはしてなかったか」
少し考え込むマサル。

「…そうやな…やっかみ半分でいじめてる奴はおったな」
「やっかみ？」
「あいつ、今もそうやけど、ホンマに頑張って、楽しそうに生きとったから…」
「……」

ユキは、遠くを眺めるような目つきになって、しばらく口をつぐんだ。

「オレなあ、チエと結婚しよう思うねん」
「！」
「せやから、ケンカから足洗おう思てなあ…
　今まで付き合いのあった連中にそのことゆうたら、えらい目に遭わされたわ」
「そうやったんか…」
「でも、これでええねん。オレ、一から生活やり直すんや」
「……」
「何年か、一緒に店やって、しっかり働けるゆうこと証明できたら、チエに結婚してくれてゆお

う思てる」
「……」
「ほんまは、オレ、弁護士になりたいねん。
　なれるかどうか分からんけど、店やりながら勉強は続けるつもりや」
「……」
「マサルは？」
「え？」
「将来、やりたいことあるんか」
「オレは…親父が医者やから、医学部に入って…」
「そうか。医者になるんやな」
「たぶんな…でも、まだ決めてるわけやない」
「ええ仕事やないか。…オレも頑張るから、おまえも頑張れや」
「ああ…」
「オレ、今日、こんな身体で店に行かれへんから…悪いけど、チエに適当にゆうといてくれんか」
「…分かった」

結局、マサルがアパートを出た頃には、チエの店が営業する時間になっていた。

マサルは、*食堂「チエちゃん」*　に向かって歩いていき、店の戸を開けた。

「いらっしゃーい！」

チエの元気な声が店一杯に響いた。

続・チエの青春（マサル純情編）終わり

続・チエの青春（マサル純情編）

http://p.booklog.jp/book/72115

著者 :ミナミの民
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/yoyogiz/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/72115

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/72115

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ